

気持ちの持ち方で世界は変わる

(原文)

近藤 成 (14 歳)

京都府

京都市立二条中学校

私は、人との違いを認められない社会を変えたい。少しの違いを認められないことによって、様々な問題が起こっている。身近な問題でいうと、いじめ。

少し人より可愛くて、男の子から人気のあるような人や、頭が良くて、常に学年上位にいるような人。あまり目立たない地味な人や、運動や勉強が苦手な人。どちらも、ほんの少し周りと違うだけで、いじめられてしまうようなことだってある。

世界的な問題では、人種や宗教の違いなどが挙げられる。ただ、肌の色が違うだけ、信じている神様が違うだけ。それだけのことでたくさんの人の命が無くなってしまふ、戦争だって起こってしまうのだ。

私は、耳が聴こえにくい。けれど、幸せなことに、そのことでいじめられたことなんてない。

私の通っていた小学校には難聴学級があり、難聴の子と一緒に遊んだり、話したりするのは普通のことだった。小さい時は、それが当たり前なのだと思っていたし、ましてや、耳が聴こえにくいことなんか、友だちを作る時にハンデになるとは思っていなかった。でも、大きくなって、障がいがいじめられる原因になってしまうこともあるのだと知った。

私にとって、耳が聞こえにくいことは、もはや普通のこと。もちろん、障がいを持つ人が少ないのは分かっていたし、みんなにとって耳が聞こえにくいことは普通ではないことは気付いていた。

それでも、私は、自分は変だ、とか、障がいがあるのは悪いことだ、なんて思ったことはない。私が、今まで耳の事で嫌な思いをすることがほとんど無かったのは、こうして私自身が自分を認められて、大好きで、大事だと思ってきたからだと思う。こう言うと、自己中だとか、ナルシストだとか思われるかもしれないが、自分が自分を好きでなかったら、誰が自分を好きでいてくれるのだろうか。

いじめは、もちろんいじめる人が一番悪い。それは当たり前のことだ。けれど、自分も認められないでいる、自分と周りとの違いを、他に誰が認めてくれるのだろうか。

もし、私が、自分の障がいを認めていなかったら、自分を変だなんて思っていたら、きっと、友だちは私から離れていっていただろう。耳の事で辛い思いをすることだってあったかもしれない。

でも、私は、障がいを含めて私なのだ。そして、その障がいと一緒に生きてきた今までがあるから、今の私がいるのだ。そうやって、自分が自分を認められたら、周りとの違いなんて気にしないで、自分

らしくいられたら、いつの間にか周りも、自分を認めてくれているものだ。

人との違いを認められない社会を変えるには、まず、自分が自分を認められるように、一人一人が変わることが大切なのだと思う。周りと違うことが悪い事ではないと気づけたとき、「人との違い」は「それぞれの魅力」に変わるだろう。そうして、それぞれがそれぞれの魅力を知ることが出来たなら、傷つく人もきっと減るはずだ。

周りとの違いを、魅力を、否定して、批判するより、認めて、その良さを知ることの方が、ずっと難しい。だからこそ、お互いの魅力に気付けたなら、きっと何かが変わる。そうやって、違いを認め合える社会になることを願って、まずは自分を認められる自分を信じていきたい。